

チェルノブイリの子どもたち



チェルノブイリ子ども基金 NEWS No. 109 2018年2月17日発行

チェルノブイリ 32 年・福島 7 年救援キャンペーン

広河隆一講演会 ～チェルノブイリが福島に問うこと

4月20日（金）ココネリホール（東京都練馬区）

19:00 開演（18:30 開場）

フォトジャーナリストでチェルノブイリ子ども基金を設立した広河隆一さんの講演会を開催します。2017年7月、広河さんとともに福島の子がベラルーシの保養施設「希望」で、ベラルーシの子と交流、その様子はNHK-BS1で放映され好評を得ました。これまでチェルノブイリと福島に何度も足を運び、被害の様子を伝えるとともに子どもたちの救援を続けてきた広河さんの講演、ぜひみなさまお誘いあわせの上ご参加ください。（詳細は p. 2）

☆イベント開催のための賛同金を募集しています。

一口 1,000 円 郵便振替口座 00160-4-98316

口座名 チェルノブイリ子ども基金

～～～～～目 次～～～～～

- p.2 2018年4月20日イベント詳細
- p.3～4 2017年12月支援報告／2018年支援計画
- p.5 2017年12月2日報告会の感想
- p.6～7 “チェルノブイリ 現状と実態をたどる旅”に参加して
- p.8～9 2017年8月ベラルーシ家族訪問
- p.10 里親の頁
- p.11 チェルノブイリの歌声
- p.12 「沖縄・球美の里へめんそーれ」
- p.13 黒部ドクター
- p.14 決算報告
- p.15 募金・救援状況
- p.16 事務局から

右写真：2017年12月クリスマス会
（ベラルーシ・ゴメリの慈善団体
「困難の中の子どもたちへ希望を」
（詳細は p.2～3）



～ チェルノブイリ 32 年・福島 7 年救援キャンペーン ～
広河隆一講演会 ～チェルノブイリが福島に問うこと

2018 年 4 月 20 日（金）19:00 開演（18:30 開場）

ココネリホール（練馬区立区民・産業プラザ 3F）

（西武池袋線・西武有楽町線・都営地下鉄大江戸線 「練馬駅」北口徒歩 1 分）

入場料 予約 1000 円 当日 1300 円（全席自由） 定員 300 名

※予約受付は 4/19（木）午後 3 時まで。定員になり次第お申し込みを締め切ります。

〔主催〕チェルノブイリ子ども基金／未来の福島こども基金

チェルノブイリ事故から 3 年目に私は現地入りし、多くのことが隠されているのを見た。病気があらゆる場所で牙をむいていた。このとき、すでにベラルーシやウクライナでは小児甲状腺がんをはじめ、あらゆる病気の多発を訴え、助けを求めている医師や市民がいた。しかし IAEA や ICRP などの国際的な「知見」をふりかざす専門家たちはそれを無視した。そして翌 4 年目には小児甲状腺がんが急増。それをも「知見」は無視した。このころ私たちは救援運動を開始したが、あまりに非力だった。…やがてチェルノブイリと同じように、日本でも甲状腺がんの多発や、それが事故との因果関係があることを隠せなくなる瞬間がくるだろう。…しかし絶望するには早い。異なった「未来」を迎える可能性がまだ残っている。それにはあまりに時間が足りないというか、まだ時間が残っているというかは、今からの私たち次第だ。

広河隆一「写真記録 チェルノブイリと福島～人々に何が起きたか～」(DAYS JAPAN)より抜粋

＜講演＞ 広河隆一

フォトジャーナリスト。『DAYS JAPAN』発行人、「NPO 法人 沖縄・球美の里」名誉理事長、
「チェルノブイリ子ども基金」設立者。

＜報告＞

鈴木薫：「いわき放射能市民測定室たらちね」事務局長

佐々木真理：「チェルノブイリ子ども基金」事務局長

＜お申し込み方法＞

下記 Tel/Fax/E-mail いずれかの方法。E-mail の場合は、件名を「4/20 イベント申し込み」として次の項目をご記載ください。

●お名前（ふりがな） ●予約人数 ●E メールアドレス ●電話番号 ●郵便番号・住所

⇒ お申込み・お問い合わせ：チェルノブイリ子ども基金

Tel/Fax：03-6767-8808 E-mail：chernobyl1986@jcom.zaq.ne.jp

* このイベントのチラシ配布やポスター掲示にご協力いただける方は上記連絡先へご一報下さい。
また、イベント当日のボランティア（受付、物販、会場案内等）も募集しています。

2017 年 12 月 支 援 報 告 ／ 2018 年 支 援 計 画

皆様の募金のおかげで2017年もチェルノブイリの子どもたちへの支援活動を行うことができました（決算報告は14頁をご覧ください）。みなさんのご支援に心よりお礼を申し上げます。ありがとうございます。2017年12月の支援報告と、2018年の支援計画をお知らせします。引き続きご支援いただけますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

★2017 年 12 月の支援報告

<ベラルーシ> 慈善団体「困難の中の子どもたちへ希望を」
(ゴメリ市) クリスマス会



2017年12月23日、ゴメリ市で会員の病気の子どもたちのためにクリスマス会が行われました。ゴメリ市と、ブラーギン・ホイニキ・ドーブルシ地区の4～13歳、65人の子どもたちが参加しました。子ども基金はこの会の費用の一部として600ドルの支援を行いました。ほかに地元の企業などからの寄付により（毎年寄付は減っているそうです）、ぬいぐるみ、お菓子、食品などのプレゼントを購入し、子どもたちに渡されました。この団体の事務所が間借りしている病院の一室を

借り、クリスマスツリーを飾り、団体のスタッフや会員の子どもの親たちがクリスマスの扮装をし、ゲームや歌、ダンスなどをして祝いました。会場まで来られない子どもたちには、スタッフがプレゼントや食料品、紙おむつなどを家に届けました。また生活に困窮している45の家族には、缶詰や調味料などの食品も手渡されました。18歳（ベラルーシでは18歳から成人）を迎える会員にもお祝いの品が渡されました。全員で380人の子どもがプレゼントを受け取りました。

送られてきた写真の中には、2017年8月の保養に参加した子どもたちの顔も多く見られました。



保養に参加していた時は夏でしたので、Tシャツや短パンなどの服装だった子どもが、クリスマス会ではジャケットやワンピース姿で、少し誇らしく大人っぽく見えます。一方、子どもの体調がよくないため代わりにプレゼントを受け取りに来た母親の姿や、化学療法後で髪の毛のない子どもが自宅でプレゼントを受け取る写真もありました。この団体には、昨年12月に新たな病気の子ども12人（4～7歳）が会員となりました。2018年2月にも新たな子どもを受け入れる予定です。代表のポホモワさん「また多くの病気の子どもが私たちの団体の会員になりました。できるだけ支援をしていきたい」。子ども基金に、新たな里子支援の要望が送られてきました。

<ウクライナ>

「内分泌研究所」（キエフ市）医薬品・放射線測定器

ウクライナ全土から年間約1400人が甲状腺の治療に訪れるこの病院に、患者のための甲状腺ホルモン剤・カルシウム剤購入費用19300ドルと、放射性ヨウ素治療室で使用する放射線測定器購入費用700ドルを支援しました。

★2018年の支援計画

<ベラルーシ>

●児童健康回復センター「希望」

- ①「腫瘍病の子どものための保養」
- ②「甲状腺がんの手術を受けた親とその子どものための保養」



2017年8月「腫瘍病の子どものための保養」に参加した子どもたち

●慈善団体「困難の中の子どもたちへ希望を」：この団体の里子の支援。「希望」で実施する病気の子どものための保養費用、会員の子どものための医薬品代、スタッフ給料と事務所維持費の一部。

●すでに解散した慈善団体「チェルノブイリのサイン」に所属していた里子支援、元スタッフ（里子支援に関する連絡等）1名分の給料。

<ウクライナ>

●慈善団体「チェルノブイリの子どもの生存」：この団体の里子の支援。スタッフ給料と事務所維持費の一部。

●「汚染地域に住む病気の子どものための保養」：ウクライナ国内の子どもサナトリウムで実施。

※子ども基金が現金で支援したものは、現地団体・病院が物品等を購入後、領収書を提出してもらいます。子ども基金は、書類上のチェックをするとともに、事務局スタッフが現地を訪問した際に確認を行っています。



2017年12月2日(土)「チェルノブイリ子ども基金」「未来の福島こども基金」共催、「生活協同組合パルシステム東京」後援により、報告会を開催しました。当日の参加者は65名。受付・物販などパルシステムスタッフと子ども基金のボランティアの方々にお手伝いいただきました。ご参加いただいたみなさま、ありがとうございました。前半、音量が小さく聞きづらかったというお声がありました。申し訳ございませんでした。今後は十分気を付けます。会場をお借りしたパルシステム東京さんには、宣伝、当日の運営と多大なご協力いただきました。子ども基金が2017年8月、ベラルーシの保養施設「希望」で開催した病気の子どものための保養プロジェクトはパルシステム東京「平和カンパ」よりご支援いただきました。

<参加者の感想>

★チェルノブイリ子ども基金が、事故後から長い年月支援を続けていることに感銘。未だ世代をかえても影響を受けていることに改めてショック。「福島」にチェルノブイリの事故、影響を活かして、子どもたちを守ろう、サポートしようとしているのが民間。国、東電は不都合なこととして、又、避難地域には「賠償金」で口封じ。そんな国を結果として容認してしまっている「大人」の無知、無関心で自身が恥ずかしい。

(60代女性) ★子どもらしい日常を過ごせない…という大人の責任。自分の行動と、それを子どもたちに伝え続けていくことを大切にしたいと思う。(40代女性) ★チェルノブイリ、福島の今を知ることができてよかった。これからは職場、個人として何かできたらと思う。

(40代女性) ★チェルノブイリ子ども基金の保養報告がよかった。練馬区で保養キャンプをする団体だが、チェルノブイリ事故のあとのように国がきちんと対応すべきだと強く思う。小さな団体なので寄付頼みしかない。助成金も復興

に流れていく傾向があるように思う。ベラルーシ「希望」のような「保養」をめざして頑張っていきたい。保養の必要性を変わず訴えていっていただきたい。(70代女性) ★保養所のことを初めて知った。それが子どもにとっても有効であるということも理解した。福島の子供たちの今後の心配になった。(30代) ★「たらちね」でエコー以外の診療ができるようになったのはよかった。関東にもすでに甲状腺がんのお子さんが出ているので、免疫力を上げることと、早期発見ができるような体制が作れないかと思う。(50代女性) ★チェルノブイリと福島県のもとの原発事故の関連性について少し理解ができた。(60代男性) ★国策として原発を推進した日本政府は、国策としてその被害者、特に子どもを救済する責任がある。国策として保養の制度化、全面的な予算措置をすべきと改めて思う。(70代) ★地図的や線量等データ的な全体像があれば尚よいと思った。全般的に情緒的なものが先行し何でも原発や放射線のせいにしすぎているように感じられた。黒部先生のお話を踏まえると、結局は心配しすぎのストレスの問題のように思われた。それであれば不安をやわらげるようなことが必要かと。(40代男性) ★原発はやはり大変恐ろしいものであると思った。特に黒部先生のお話を興味深く聞いた。次世代にまでずっと被害をもたらす、人の人生に大きな影響を与えてしまう原発を許してはいけないと思った。一切、認めようとしない政府に声を上げ続ける必要がある。(50代女性) ★被害が今も続いている状況を知る努力を続けたい。(70代女性)

フォトジャーナリスト大石芳野さんに誘われ、2017年9月にこの旅に参加した。大石さんは旅の目的をこう記している。「フクシマを体験したことで、チェルノブイリは他人事ではなくなりました。苦境に追い込まれたのはどちらも住民たちです。チェルノブイリでは放射能に汚染され、ふるさとを奪われた人びと、とりわけ子どもたちは病と闘いながらも逞しく成長して今や親にもなりました。健康をはじめ失ったものは余りにも大きいですが、それでも朗らかに逞しく生きる人びとから多くを教えられます。」その言葉通り、様々な方と出会い多くを学ぶことができた。

ツアーは8日からだったが、私たちは10日朝ウクライナ・キエフで合流し、バスで10km圏に。廃墟の幼稚園、プリピャチ市、サマショール（立入禁止区域に無許可で戻った住民）の住むバパチチ村を訪問後、原発作業員専用列車でスラブヂチへ。11日に原発内を見学し、キエフへ戻る途中でバンダジェフスキー博士とお会いした。12日はキエフの放射能医学研究所付属病院と避難区域管理局情報センターを訪問。13日朝、ベラルーシ・ミンスクへ飛び、バスで子どもセンター「希望」に直行し子どもたちと交流。14日はミンスクの大祖国戦争史博物館などを見学し、ツアー一行は帰国の途に。私たちは18日まで市内に滞在。大石さんとベルラド放射能安全研究所（民間の放射能研究所）や、私たちの里子だったアレーシャの自宅を訪問。またナチスドイツに全村民が虐殺されたハティニ村などを見学。さらにミンスク在住の花田さん家族のご尽力で高校を訪問し、生徒たちに原爆の話をする機会をいただいた。ここではウクライナに絞り報告する。

《チェルノブイリ原発の第二石棺》



日本を含む40以上の国が支援し、約2000億円を投じた第二石棺が2017年4月に完成した。燃料デブリの取り出しが不可能なため、崩れ落ちそうな4号炉を高さ109m、長さ162m、幅257mの巨大なドームですっぽり覆った。だが寿命100年。この先、何度作り直すのだろうか。

3号炉の制御室に入った。事故を起こした4号炉と同じ仕様だが、膨大な数のスイッチが並んでいた。4号炉の近くの空間線量は $2\mu\text{Sv/h}$ 程度だが、原発横の「赤い森」を通過するとバス内でも $10\mu\text{Sv/h}$ に。事故直後、高い放射能ブルームが直撃したこの森は、その後赤く変色したという。

《廃墟の幼稚園とプリピャチ》



原発10km圏内の建物の多くは取り壊されているが、幼稚園がそっくり残っている。建物の中は昼寝用のベッドが並び、そこにも人形が置き去りになっていた。ここにいた子どもたちはその後どうなったのだろうか。31年間、この人形は人間

の愚かさを見つめ続けている。

その後廃墟のプリピャチ市を訪ねた。高層住宅の間にびっしりと樹が生い茂りまるでジャングル。錆つき壊れかけた観覧車がむなしい。

《サマシヨールの村》

その近くの廃村に 80 歳のイワンさんと 76 歳のマリアさんを訪ねた。大石さんが昨年もお会いしており、私たちを喜んで迎えてくださった。お二人は勝手に戻ったサマシヨール。畑でジャガイモや野菜を栽培し、鶏を飼い生活している。週に一回、生活用品や食料を売る車が来るという。

部屋の中には息子さんの写真や手製の刺繍布が飾られ、大きなペチカで真冬も温かい。自家製のピクルスとウオッカをふるまいながら話す姿に、私たちの方が元気をいただいた。事故さえなければお孫さん達に囲まれて暮らしていたに違いない。子や孫と離れても故郷で昔ながらの生活を続けたいというお二人の強い思いを感じるとともに、家族と暮らすというささやかな幸せを根こそぎ奪い去った事故の罪深さを改めて感じた。



《バンダジェフスキー博士》

ベラルーシ人のバンダジェフスキー博士は、ゴメリ医科大学初代学長として原発事故後に亡くなられた方々の解剖を行い体内に蓄積したセシウムの研究をされた。ところが 1999 年に突然逮捕され 6 年間投獄。研究成果やデータはすべて奪われた。その後、国際社会からの働きかけで釈

放され国外追放になり、ウクライナのイワンコフ中央病院に研究所を設置、EU の資金援助を受けてイワンコフ郡の子どもたち全員の被ばく状況を調査している。氏は子どもたちの免疫機能が低下していること、9 割以上に心筋の代謝障害があること、事故の収束のため大量の鉛が投下されたことも影響していることなどを語られた。

物静かに語る氏の姿に、ベラルーシに残る妻や娘と会えない中でも、隣国の子どもたちのために取り組み続ける不屈の精神を感じた。なお博士の著書中에서도『放射線セシウムが与える人口学的病理学的影響』（久保田衛訳、合同出版）にイワンコフの取り組みが詳しい。

《放射能医学研究所付属病院》

ここでも子どもの健康について伺った。チェルノブイリ被災者は①リクビダートル(事故処理業者)②避難した人③事故後も汚染地域に住んでいた人④これらの方々の子どもたちとされ、約 300 万人が登録されている。彼らは今も 2 年に 1 回の健康診断を受ける。低線量被曝でも甲状腺がん、白内障、がん、心臓病、神経症、脳の病気が増えている。日本では甲状腺検査を減らそうとしていると言うと、できるだけ多く検査すべきだと即座に答えられた。

《避難区域管理局情報センター》

ここで事故により放出されたプルトニウムの多くがウクライナ北部に降り注いだという事実を知った。立ち入り禁止区域の 40%がプルトニウムで汚染され、1 万年以上住めない。残りの 40%は 50 年後には住めるようになると話された。

チェルノブイリと福島とは異なる条件があり、そのまま重ねることはできないが、私たちが何よりも学ぶべきは、子どもたちを守るために最大限の努力をするという姿勢ではないだろうか。

チモフェイ・D (2007 年生まれ)
ゴメリ市

母親の話「息子は頸部の血管腫と診断され、生後 3 か月で手術を受けた。首の深いところ、甲状腺の近くにある血管腫は取り除くことはできなかった。初めの頃はミンスク市の小児がんセンターで定期検査を受けていた。今はミンスク市の小児外科センターで年に 2 度定期検査を受けている。今のところしばらく様子を見るように言われている。血管腫のほか、アトピー性皮膚炎や甲状腺の問題もある。原因は食べ物だけではないようだ。ビタミン剤などを飲んで皮膚に影響がでることがある。免疫力を高めるために、学校のプールで水泳を習っている。強度の近視で眼鏡が必要なため、目に負担がかからないよう気をつけている。きれいな空気の下で過ごすことはとても大事だと思う。だから今回、「希望」の保養に参加させてもらえて本当にありがたかった (2017 年 8 月子ども基金が開催した保養プロジェクトに参加)。息子の健康のためなら何でもしたい。里親の方からの支援金は息子の健康回復のために使

う。自分が出産したとき、周りの子どもたちはみな何らかの健康上の問題があった。出産時は何の問題もなかったのに、すぐに病気がみつかった。ああ、やはりうちの子もそうなのか…と思った。

私はレチツァ (ベラルーシ・ゴメリ州) の出身。チェルノブイリ事故後、母と一緒にロシアに 3 か月避難した。私は甲状腺に問題があり、定期検査を受け、薬を飲んでいる。海藻や魚を食べるようにも言われるが、こちらで売っている魚は、何度冷凍・解凍されたかわからないようなものだから、栄養などないのではないかと思う。ベラルーシでは甲状腺に問題があっても、医師から当たり前のことのように扱われる。レチツァの私の両親のところには畑もあるが、あそこも汚染地だから、あまり健康に良い食べ物とは言えない」

父親の話「自分はスヴェトロゴルスク (ゴメリ州) で生まれたが、母の仕事の関係でホイニキ (ゴメリ州。事故後は高濃度汚染地となる) に引っ越した。チェルノブイリ事故が起きたとき、プリピャチ川で釣りをしていた。原発が爆発したと聞いたが、ああ、そうなのかと思っただけだった。それが何を意味するのか、どんな危険なことなのか、何も知らなかった。事故後、夏の間だけ子どもたちは保養に行った。でも 9 月の新学期にはまたホイニキに戻った。事故から 2 年後、ゴメリに引っ越した。自分も妻と同じで、甲状腺に問題があり定期検査を受けている。自分の母親は心臓の病気があり、十二指腸潰瘍、胃潰瘍も患っている。『チェルノブイリ人』だから仕方がないのだと思う」



マリーナ・K (1985 年生まれ)
ミンスク市



子どもの頃甲状腺がんの手術を受けたマリーナは、2017 年 5 月に二人目の子どもを出産。「長女アミーナは 4 歳。保育園が大好き。絵を描いたり、歌ったり踊ったりしている。上の子が女の子、下の子が男の子というのは夢だったのでとてもうれしい。夫の収入は少なく、私の障がい者年金も僅かです。生活が苦しいため、村に住んでいる両親やきょうだいに助けてもらっている。自分が子どもの頃から日本の里親の方に支援していただいている。こんなに長い間私を心配してくれて、子どもが生まれたら一緒に喜んでくれる。本当にありがたく幸せなことだと思う」

マリーナはベラルーシ・ゴメリ州ホイニキ地区の村で生まれた。村はチェルノブイリ事故後高濃度汚染地区となり、グロドノ州の村に移住した。引っ越したばかりのころは、元から住んでいる住民から「新しい家をもらえていいね」と言われたり、学校で移住者の子どもたちには特別な食事を提供されることに嫌味を言われたりしたという。

ガリーナ (1985 年生まれ)、イワン (1983 年生まれ)、息子アンドレイ (2008 年生まれ)
ザスラヴリ市



ガリーナとイワンは、子ども基金がベラルーシの保養施設「希望」で開催した『甲状腺手術後の子どものための特別保養』に参加して知り合い結婚した。2017 年 8 月、同施設で保養プロジェクトが行われている最中、息子を連れて訪れた。写真中央は「希望」の古くからの職員。再会を喜び合った。

「ここには子ども時代の良い思い出がたくさんある。甲状腺がんの手術を受けた時はまだ子どもだったので、よく事情がわからなかった。ただ母がひどくショックを受けていたことを覚えている。どうしてそんなに嘆き悲しむのかと思った。確かに体育の授業に参加できないとか薬を飲まなければならないとか、変化はあった。でも自分はまだできることがたくさんあると思った。勉強も続け、就職もした。そして『希望』での保養で夫となる人と知り合い、息子も生まれ、家族をつくることができた。保養に招待してくれた日本のみなさんにとっても感謝している」新しいアパートに最近引っ越したことなどをうれしそうに話すガリーナの笑顔は、充実した生活を送っていることを物語っているようだった。



里親のページ

チェルノブイリ子ども基金では 1998 年から甲状腺手術後の子どもたちの里親支援を開始しました。現在は、さまざまな腫瘍病、血液病など 65 人の子どもたちが支援を受けています。里子と家族からの手紙をご紹介します。

✉ お手紙と贈り物をありがとうございます。

Y さんはお変わりありませんか？僕は 3 年生になりました。たくさん勉強しています。絵も描いています。こちらは寒くて雪が積もっています。そちらのお天気はいかがですか？僕たち家族はみんなでクリスマスツリーを飾りました。僕は妹のエセーニヤが大好きです。いつもいっしょに遊んでいて、本当に楽しいです。僕はよく母の手伝いをします。妹がまだ小さく手がかかるので母は疲れています。僕たちにおいしい食事を作ったり、整頓したり、勉強もみてくれます。父は一生懸命働いていてとても疲れています。父も僕たちのことをいつも心配してくれています。そしてお金を稼いでくれます。休みの日にはみんなで公園を散歩します。通信教育で学んでいた母は卒業証書をもらいました。家族みんなで喜びました。Y さんのうちの猫ちゃんたちはとてもかわいいですね。うちにも猫がいます。名前はノルドといいます。両親が僕にくれました。僕には猫の毛がよくないので、ノルドは毛のない種類の猫です。ご支援を本当にありがとうございます。あなたが僕たちと共にいて、助けてくださっていることに感謝します。クリスマスと新年のお祝いを申し上げます。ご健康とご多幸をお祈りします。

マトヴェイと家族より
(ベラルーシ・ゴメリ市)

✉ S さんへ。あなたのような方がいらっしゃることをとてもうれしく思います。娘ウリヤーナのことを少しお話します。学校に通い、よく勉強をしています。小犬のミシェルは彼女の大切な友だちです。動物が大好きな、明るく優しい子です。勉強の他には、ダンス、ボーリングや水泳、ソリ遊びやスケートをしています。病気の時にできなかったことを取り戻そうとしています。あなたのご支援に心よりお礼を申し上げます。

ウリヤーナと母より
(ベラルーシ・レチツァ市)

✉ A さんへ。ご支援に心からの感謝を申し上げます。私は病院での総合検査を受けることが出来ました。どうか神様があなたに健康と心安らからで満ち足りた日々を授けて下さるようお祈りいたします。私の両親からもお礼を申し上げます。

アレクサンドラより
(ウクライナ・ナロジチ市)

✉ S さんのご支援に感謝しています。そしてこのようにお手紙を書けることを嬉しく思います。娘のbogdanaは15歳になりますが、歩くことができません。彼女の生活ができるだけ快適になるよう、私たちはあらゆる努力をしています。車椅子で外に連れ出せるように、アパートの上階から一軒家に引っ越しました。私たちのことを忘れずにいてくださり、ありがとうございます。あなたにお会いできたらとてもうれしいです。ご健康とお幸せをお祈りいたします。

bogdanaの母より
(ウクライナ・ナロジチ市)

チェルノブイリの歌声 ～みなさまからのメッセージ～

◆昨日 NHK-BS の番組「母たちの祈り」を見ました！良かった、お子さんへの深い想いに胸を打たれました。子ども基金のカレンダーでおなじみのベラルーシの女性も登場していましたね。福島の甲状腺がんといい沖縄小学校のへり窓落下といい、何の責任もない子どもたちにどうして犠牲が重なるのでしょうか。（東京都Hさん）【2017年12月、2018年1月、NHK BS1 特集「母たちの祈り ～フクシマとチェルノブイリ～」放映されました。2017年7月、ベラルーシの「希望」に広河隆一さんと福島の母子が訪問。子ども基金が支援したベラルーシの母子と交流しました。】◆カレンダーを早く送ってくださりありがとうございます。毎年待っている方々へ届けます。（東京都Kさん）◆カレンダーが届きました。子どもたちの笑顔はやはりいいものですね。ありがとうございます。

（兵庫県Hさん）◆カレンダーを最終頁まで拝見しました。毎月の写真のキャプション、そして小窓の説明が全体的に詳しく具体的で、写真の説明がさらによく伝わってくと感じました。放射能汚染、放射線被ばくの結果としての身体の不調の病名が今回は特に多岐にわたっていることも感じました。片眼が不調の子の写真もあり、言葉を失いました。購入者の方々に子どもらの素敵な笑顔の写真だけでなく、それぞれの写真の説明にも眼が届くとよいと強く思いました。部屋の壁の上の方に掲げることが多いですから、説明まで目がないともったいないと思うのです。ご苦勞のカレンダーがあちこちに普及し、甲状腺がんなどのことを知る人が増え、再稼働はとんでもない、という流れに再びなってほしいです。子ども基金の活動のますますの発展を念じております。事務局の皆さん、健康には気をつけられて、ご活躍を願っております。（愛知県Kさん）◆この活動をしてくださっていることに感謝しています。今年もよろしく願いいたします。（三重県Tさん）◆世界中の子どもたちの状況はますます厳しくなっているのですが、諦めることなく、できることをひとつひとつやっていきましょう。（大阪府Tさん）

●神奈川県横浜市にある川和保育園さんは、長きにわたりチェルノブイリの子どもたちをご支援くださっています。職員の方からいただいたお手紙を紹介します。

～*～*～*～*～*～*～*～*～*～

寒い日が続きますが、いかがお過ごしでしょうか。秋に黄金色に輝いた園庭も今はすっかり冬模様となりました。

先日は、報告会に参加させていただきありがとうございました。佐々木さんをはじめ皆様にもお会いでき嬉しかったです。お話を伺いながら、時が経過すると共に増す難しさもあることを感じました。特にチェルノブイリの事故を知らない次世代にも及ぶ健康被害。そして事故との因果関係がより曖昧となり、チェルノブイリは終わったということにしたい政府…。そして福島の子どもたちはその後を追っているということ。

これらのことを改めて知り、継続した支援の大切さを職員間でも話し合いました。そしてチェルノブイリの今、福島の今、陸前高田の今を手紙で父母に伝え、子どもたちには各クラスの担任から言葉で伝えました。ひとりひとりの子どもたちが今、何が自分たちにできるのかを家族と考え集めた献金。地道な活動を長期に亘りチェルノブイリの子どもたちのために行って下さっているチェルノブイリ子ども基金の皆様にとすことは、神様も喜んで下さると思います。

私共、川和保育園は12月22日、23日にクリスマス礼拝を挙げました。今年も心静かに皆でお祝いをすることができました。こんな日々を過ごせることに感謝し、自分以外の人たちにも思いをはせたいと集めた献金です。今も困難な状況におかれている子どもたちが幸せを感じ、すごせる日々が来ることを祈ります。そして皆様の活動のお手伝いができれば幸いです。どうぞよろしくお願い致します。



2017年12月27日
川和保育園

球美の里にめんそーれ！

「あつ〜い〜！」12月の学童保養の初日。久米島空港に降り立った子どもたちの最初の一声。

沖縄県の冬は天候があまり良いとはいえないが、子どもたちが訪れた久米島は天気がよく、長袖で過ごすにはやや暑い気温でした。早朝に出発した子どもたちはおおよそ1日かけて福島から久米島に移動しました。到着したみんなの顔に疲れは見え、元気そのものでした。この84次保養に参加した子どもたちはほとんどの子が球美の里に初参加でした。

2日目には日本の渚100選に選ばれたイーブビーチに行きました。事前に水が冷たく泳ぐのは難しいと子どもたちには伝えていましたが、もう荷物を準備する段階で泳ぐ気満々で、水着を着ている子もいました。イーブビーチに到着してから、その景色にみんな感嘆の声を上げました。荷物を置いてからは自由に海で過ごすことに。はじめにみんな波打ち際に行き、パシャパシャと水の感触を感じたり、透き通った海を眺めたり、周りにある貝を集めたりしていました。しかし、少しすると子どもたち同士で水の掛け合いが始まり、走り回り、そして海に飛び込みました。気温は20℃そこそこ。水温もそんなに高くないのですが、子どもたちは夢中で楽しんでいました。辺りには笑い声がこだまし、みんなとてもいい顔をしていました。

翌日、登武那覇（とうんなは）園地に行きました。ここは城（ぐすく）があった場所で、高台にあり、海も山も見渡せるととても眺めのいい公園です。まずはスタッフがウォーミングアップのためにゲームを用意して、みんなで体を動かしました。その後、子どもたちは高台にある岩に登って写真を撮ったり、段ボールすべりをしたり、おにごっこやかくれんぼを存分に楽しみました。汗だくになって走り回っている子どもたち。その表情はとてもイキイキしていました。



また、毎月第1・第3金曜日12:30〜30分間、FMくめじまで「Hello!球美の里」という番組を放送しています。小学生や中学生の保養の場合は、2〜4人で出演します。84次保養では女の子の仲良し3人組に声をかけました。スタジオへ移動する車の中ではたくさんおしゃべりをしていましたが、スタジオが近くなるにつれ、会話が減っていき、緊張した様子が伝わってきます。ラジオ局のドアを開けスタジオに入ると、声がいつもより小さくなり、質問されたこと以外は話さなくなっていました。番組ではいつも宇江城（マンデー）さんが進行してくださり、子どもたちは球美の里や久米島に何回来たのか、久米島ではどんなところに行ったの？とか、どんなご飯がおいしかったかなど質問し、子どもたちが一生懸命答えていました。番組前半では緊張して言葉数が少ないのですが、だんだん慣れてきて、後半はとても饒舌に話していました。

子どもたちはすごいもので、初めて参加した子がほとんどなのに、気がつくともみんな仲良くなっていて、帰る前の日の夜には「まだ帰りたくない〜」の声も聞こえてきました。帰る日。出発の飛行機は午後のため、午前中はみんなで大掃除。朝は布団を干し、朝食後は、本館や新館、ピラミッド・図書館、ありとあらゆる場所を掃除しました。みんな積極的で、「次何やるの？」とどんどん質問が来ます。あっという間に掃除が終わり、昼食を食べるとお別れの時間。みんな車に乗り込み、スタッフが見送る中、球美の里を出発します。

1週間という長いようで短い期間ですが、久米島の大自然に触れること、のびのびと外を走り回ることなど、子どもたちにとって、とても大きな思い出となり財産となるでしょう。

子どもたちがこのような貴重な経験ができるのも、カレンダーの売り上げやイベントの収益を保養費として支援いただいているおかげです。誠にありがとうございます。心よりお礼申し上げます。

沖縄・球美の里久米島事務局長
三井裕司



「いわき放射能市民測定室たらちね」の中に、「たらちねクリニック」が動き出しました。ここの目標は、福島とその周辺の被災地の人たちの灯台になることです。まずは免役の低下の心配と母親の不安への対応です。今次々と被曝した人たちが亡くなっているとも聞きます。親が不安になるのは当然です。たらちねクリニックに来る子や沖縄・球美の里に保養に来る子どもの持参薬を見ても、福島の医療水準は低いです（練馬区も低いです）。「日本は当たりはずれのある医療」で、開業医でも腕の良い医師がいれば大学教授でも信頼できない医師がいます。

免役の働きを活性化させるには、のびのび育てることです。子どもは親の言うことを聞かなくなりますがその代わりに病気をしません。発達障害があっても育て方によって普通に成長できます。早く見つけて、2歳から良い育て方をするのです。

まずは、アレルギー性疾患と放射能の発がん性の問題です。アレルギーも発がんも免疫の仕組みの失敗によります。アレルギーは子どもであれば治せます。環境や育て方を変えることで、また思春期になると本人の気持ちの持ち方を変えることができるからです。またアメリカの心療内科グループは、がん性格C型行動人間ということを明らかにし、がんの心理療法をしています。私は予防を重視し、我慢せずに自分の思うことをしていくことを提唱します。

免疫システムは感染防御から発がんまで担っています。遺伝子ゲノムの修復機構も免疫システムの一部です。その働きも社会経済的に左右されます。

今チェルノブイリ被曝地のベラルーシ、ウクライナでは、健康な子は20%と言われ、80%の子は何らかの病気が健康上の問題があるといわれます。それは、内部被曝が高いことと外部被曝も低線量でも絶えないことです。

除染土はそのまま放置され、そこから放射能が出ています。鉛で覆わない限り、放射線は防げません。発がんは、当初「確率の問題」と言っていましたが、それはICRP（国際放射線防護委員会）の理論であり間違いで、実際は免疫システムが充分働いていれば発がんしません。それは健康であればインフルエンザにかからないことと同じです。健康であれば、つまり免役の仕組みがしっかり働いていれば、病気になりません。発がんや健康の喪失、先天的影響や遺伝的影響などすべて、免疫の仕組みが、環境や育て方などによって充分働かず、起きてしまったのです。

私はそれを取り戻そうとしています。

育て方の問題を話すと、自分の育て方が悪いと思う母親が多いのですが、それは違います。そうさせる社会が悪いのです。それには歴史を見て下さい。子どもの教育は歴史的に社会的に左右されます。ヨーロッパの教育法の歴史を調べた人がいて、それは社会的に決定されていくことを示しています。それは親の福祉が守られているか、子どもの教育と経済的自立が守られていくかによって左右されると言います。今の日本は権利も定年後の生活も大学を出てからの生活も保障されていない時代です。それが母親たちの不安の原因です。

でも私は宮沢賢治のように、「心配しなくていいよ」と言いたいのです。ぜひ私に相談して下さい。なんとかします。それだけ言い切れるようになります。アレルギーは比較的容易ですが、発達障害は少し手がかかりますし、成長後では難しくなります。発がんも心の持ち方と、生き方によっても変わることが判りました。もっとのびのび、くよくよせず、今からでも遅くありませんから、賢く楽しい人生を送りましょう。

黒部信一：すずしろ診療所所長 小児科医師

ブログ <http://kurobe-shin.no-blog.jp/>

2017年度決算報告書
【2017年1月1日～12月31日】

収 入 項 目	金 額
前期繰越 募金	15,920,175
救援一般	12,853,236
保養費	1,280,790
特別保養費*1	70,000
里子支援*2	4,959,018
ウクライナの女性の治療支援	9,000
救援キャンペーン	
2017年4月イベント	777,592
2017年12月保養報告会	24,500
2018年4月イベント	3,000
購読料・運営費*3	1,406,405
預貯金利息	2,824
物販売上	
本・ポストカード・CD・民芸品	103,480
カレンダー2017	528,870
カレンダー2018	1,829,360
小 計	39,768,250
合 計	39,768,250

支 出 項 目	金 額
救援	
医薬品・物品	3,660,760
保養費	2,694,221
団体運営費*4	1,066,705
里子支援	4,730,514
緊急支援*5	181,168
ウクライナの女性の治療支援	1,192,319
派遣費	1,423,312
送金・為替手数料	68,426
未来の福島こども基金	47,989
救援キャンペーン	
2017年4月イベント	510,493
2017年12月保養報告会	2,592
2018年4月イベント	60,400
事務運営費	
国際 Tel・Fax	0
国内 Tel・Fax	100,250
印刷・コピー費	62,480
ニュースほか発送費	420,608
人件費	2,171,192
交通費	204,630
事務消耗品費	227,307
事務所費	376,360
広告・宣伝費	26,590
資料・会議費	8,000
国内振込手数料	16,238
物販仕入	
本・ポストカード・CD・民芸品	12,608
カレンダー2017	6,838
カレンダー2018	956,643
小 計	20,228,643
次期繰越金	19,539,607
合 計	39,768,250

*1 旧振込用紙項目「特別保養費」→「保養費」として支出しました。

*2 里子支援 65人(経費1割、2018年1～6月支援分も含む)

*3 (株)カタログハウスからの運営費募金100万円含みます。

*4 現地団体のスタッフ給与、事務所費など。

*5 緊急支援3人

＊ 切手、はがき等4,615円相当も寄贈されています。

＊ カレンダーの収入・支出とも次年度にまたがります。2017年度のカレンダー収益は1,448,441円でした。

＊ 次期繰越金が多いのは、2017年後半に多額の募金をいただいたためです。

2017年度の会計監査の結果、適正であることを認めます。

2018年2月7日

会計監査

監事

鈴木 由利子

監事

清水 玲子



募金・救援状況



●募金状況 2017年10月～12月、2018年1月 (単位:円)

	10月	11月	12月	2018年 1月
募金件数	61	274	267	97
救援寄付金	3,263,610	841,892	2,669,623	247,210
保養費	94,000	174,670	261,600	23,700
里子支援	162,900	87,940	238,760	1,736,680
ニュース購読費	18,000	74,000	72,000	14,000
合計	3,538,510	1,178,502	3,241,983	2,021,590

* その他、切手、ハガキなどのご寄付をいただきました。

●救援状況 2017年10月～12月、2018年1月 (単位:円)

<ウクライナ>	
◎子どもたちの生存	
里子支援金 8人 (2018年1～6月分の支援金)	308,394
緊急支援 1人 (2018年1～6月分の支援金)	34,266
運営費 (通信費、家賃、スタッフ給料)	308,394
現地銀行手数料	3,426

◎内分泌研究所	
医薬品	2,204,253
放射線測定器	79,947

<ベラルーシ>	
◎困難の中の子どもたちへ希望を	
里子支援 51人 (2018年1～6月分の支援金)	1,750,014
緊急支援 3人 (2018年1～6月分の支援金)	102,942
医薬品	1,372,560
運営費 (通信費、家賃、スタッフ給料)	354,578
クリスマス会 (子どもたちへのプレゼント代)	71,502

♡ 団体名一覧 ♡

(順不同・敬称略)

紙面の都合上個人名は省略させていただきます。ご寄付をいただいたみなさまに心よりお礼を申し上げます。

【10月】実教出版労働組合 放射能倶楽部、榊井書店

【11月】ケイ歯科クリニック、恵泉女学園中学・高等学校文化祭実行委員会

【12月】川和保育園父母の会、大阪北協会婦人会、OneVoiceAizu 実行委員会、川和保育園、日本キリスト教団弓町本郷教会女性の会、恵泉女学園中学・高等学校宗教部、友愛富士見町保育園、中振キリストの教会、フォークダンスを楽しむ会

【2018年1月】松山古町協会 C・S、ACT21、自治労日野市職員組合、ストッププルトニウム神奈川連絡会、実教出版労組内 NNJ、日本キリスト教団田名部教会

♡ 寄贈品 ♡

子どもたちへのプレゼントとして折り紙をご寄付いただきました。ありがとうございます。

金子様

★募金振込口座のご案内★

いつもあたたかいご支援をまことにありがとうございます。同封の振込用紙によるお振込のほか、以下の口座へ直接お振り込みいただけますので、ご都合のよい方法をご利用ください。※振込用紙以外でお振込の場合は、お名前、金額、ご寄付の内容のご連絡をお願いいたします。

(1) 郵便振替口座 00160-4-98316 口座名 チェルノブイリ子ども基金

(2) ゆうちょ銀行口座 店番 019 店名 〇一九店(ゼロイチキュー店)

預金種目 当座0098316 受取人名 チェルノブイリコードモキキン

(3) 三菱東京UFJ銀行 支店名(番号): 新宿中央支店(469)

口座番号: 普通 1688367 口座名: チェルノブイリ子ども基金



クリスマスプレゼントを手にする女の子 (2017年12月ベラルーシ・ゴメリ市)

事務局から

支援金の振り込み方法についてのお知らせ★

いつもあたたかいご支援をまことにありがとうございます。同封の振込用紙によるお振込のほか、以下の口座へ直接お振り込みいただけますので、ご都合のよい方法をご利用ください。

※振込用紙以外でお振込の場合は、お名前、金額、ご寄付の内容をご連絡いただけますと大変助かります。お手数をおかけいたしますが、どうぞよろしくお願いいたします。

(1) 郵便局の口座をお持ちの方：子ども基金の郵便口座へ直接お振込み

郵便振替口座 00160-4-98316

口座名 チェルノブイリ子ども基金

(2) 他金融機関の口座から、子ども基金のゆうちょ銀行口座へのお振込み

店番 019 店名 ○一九店(ゼロイチキウ店)

預金種目 当座 0098316

受取人名 チェルノブイリゴモキキン

(3) 銀行名：三菱東京UFJ 銀行

支店名(番号)：新宿中央支店(469)

口座番号：普通 1688367

口座名：チェルノブイリ子ども基金



れの方、どうぞこの機会にお申し込みください。

■「基金ニュースレター」について

寄付をくださった方には、使途の報告としてニュースレターをお送りしています。また、ニュース購読費(2,000 円／年)も募っております。印刷・発送などの経費の残金は、募金として使わせていただきます。(※ニュースレターは子ども基金のHPでもご覧いただけます。今後、郵送がご不要の方は、お手数ですが事務局までご連絡をお願いいたします。)

■写真展「広河隆一 戦場の子どもたち」

広河隆一フォトジャーナリズム 50 年 入場無料

3/8(木)～3/17(土)(3/12 休館) 11:00～20:00 東京芸術劇場(東京都豊島区) ギャラリー2 (問)TEL & FAX: 059-229-3078(写真展事務局)※詳細は同封のチラシをご覧ください。

下記は首都圏の方へのみチラシを同封しています。

■「ダキシメルオモイ展」2/25-26 ココネリイベントコーナー(東京都練馬区)主催:NPO 法人福島保養プロジェクト@練馬/協力:チェルノブイリ子ども基金・未来の福島子ども基金 (問)090-1253-3180(宮下)

■「江古田映画祭 3.11 福島を忘れない」2/25-3/11 ギャラリー古藤(東京都練馬区)(問)03-3948-5328

■ボランティア募集

ニュース発送作業(年3回:2・6・10月):お手伝いいただける方を募集します。どなたでもお気軽にご参加ください。次回 6/16(土)午後1時～4時頃まで。ご都合のよい時間帯だけでも大歓迎です。

場所:東京ボランティア・市民活動センター(飯田橋駅ビル セントラルプラザ 10 階) ※日程が変更になる場合もありますので、ボランティア参加希望の方は、前日までにメールかお電話でご連絡ください。電話は平日午前10時～午後5時。留守の場合は伝言をお願いします。

★編集後記★ 17 年前、ウクライナの子ども民族舞踏団「チェルボナ・カーナ」来日メンバーだった一人(当時 12 歳)が、先月観光で来日。29 歳になった彼は「日本の印象がとても強く、関心を持ち続けた。いつかまた行きたいと思っていた。働きながら数年かけて旅行を計画。節約して貯金をした」と話しました。子ども基金を通して日本と関わった記憶が、それぞれの子どもの人生に、大きな影響を与えていることを改めて感じました。(事務局)

●チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年3回(2・6・10月)発行●

〒177-0035 東京都練馬区南田中 2-7-7 Tel/Fax 03-6767-8808

E-mail: cherno1986@jcom.zaq.ne.jp

◇ウェブサイト <http://ccfj.la.coocan.jp/>

◇事務局ブログ <http://blog.goo.ne.jp/cherno1986jimukyoku/>

※当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象とはなりません。ご了承ください。